

高鳴る、 （シムーン）

ISLAMIC REPUBLIC OF IRAN

EARTH GALLERY vol.116 [イラン・イスラム共和国]

地球ギャラリー
写真・文・川崎芳勲
写真家ライター



牧畜などを通じて生計を立てるロル族の人たち。
屈託のない優しさを見た



チャドルをまとい保守的な印象があるイラン女性だが、この町で私はよく声をかけられた



イランのパン、ラバーシュを焼いている職人たち。朝は通りに香ばしい匂いが漂う



市場の近くで出会った少年二人。「見て見て!!」と言った瞬間、急にキスをし、仲の良さを見せてくれた



楽器を作る工房で出会った女の子。物語から飛び出してきたようないでたちだった



崩れかかった家が町の端に固まっている。人々の暮らしは質素で無駄がなかった



襟付きのジャケットを着るのが、イラン人男性のエチケット。仲良く日なたぼっこ中



現地の民族楽器を弾いて見せてくれた男性。乾いた空気に芯のある音が響いた



家に招待してくれたファタメ(8歳)は、鏡を大切にしていたかわいい声の女の子だった



ホッラマーバードに誓う

「正直者たちの町だ。きっと良い出会いがあるはず。行くといい」

中東の大国イランに魅せられて5年の歳月が経っていた。その間、幾度かイランに足を運んでいたが、真冬のイランは初めてだった。想像以上の積雪でクルド人居住区へのバスが運行停止になったことを受けて、長いときあいのあるイラン人家族に相談をした。「どこか面白い地域はないか」——この私の問いに対する彼の答えが、ホッラマーバードとの出会いの始まりだった。

友人の言葉を受けて居ても立ってもいられなくなり、翌日にテヘランを離れ、シア派の聖地ゴムを経由して向かった先は、イラン西部ロレスターン州のホッラマーバード。首都テヘランから約480キロの距離にあり、イランに住む5大民族の一つで、アリア系民族の末裔とされているロル族がその人口の大半を占める地域だ。ペルシャやアゼルバイジャンなどイランの主要民族に対して、ロル族はどちらかというと控えめ、ときとして田舎者と小馬鹿にされるような位置づけの民族だと聞いていた。しかし、そう小馬鹿にする人さえも口をそろえて言った。「確かに彼らは、頭で考えるより先に体が動くのかもしれない。だからこそ、どの民族より正直者で優

しく、分け隔てなく人に接する」と。イランの隠された宝を探しに行くよいうで、バスをともした老人に、自然と微笑みかけたくなった。

到着後、あてもなく歩けど、外国人の姿はまったくなく、大きなバックパックを背負う私に好奇の視線が注がれた。ローカルカフェの前を通り過ぎると、注文もせずに出てきたサンドウィッチとメーカー不明のコーラ、食後のコーヒーと至れり尽くせりだった。代金はいらぬから、一緒に写真を撮ってくれと言われる始末。宿らしきものを探していると、すれ違う人皆が手を振り、声をかけてくれる。一人の外国人が迷い込んだという通報でも受けたのか、警察が追いかけてきては、目的地まで送ろうかと手を差し伸べてくれた。イラン人は旅人に優しいことで有名だが、これほどの先制パンチによって町にほれ込んだのは、初めてだったかもしれない。

英語を話せる人が誰一人としていない中、1軒のホテルの存在を知った。しかし、いつまでたっても見当たらない。日が暮れ始め、多少の焦りを感じ始めたときに、1台の車が私の横に急停車し、声をかけられた。「乗りなよ」。声をかけてくれたのは、ホテル名を覚えてくれた青年だった。無機質な町並みが少しずつ彩りを帯び始めたのは、この青年と出会ったからだ。携帯電話の翻訳機能を使って、青年は必死にその想いを伝えようとしてくれた。「私が助けられる、心配しなくていい」の文字が、

割れた画面でポーツと光っていた。

ホッラマーバードの町並みは、土色でシンプルな造りの家が多かった。郊外には放牧や農耕で生計を立てる人が多く存在し、羊を放牧している光景は多く見られた。資源に後押しされて経済発展著しいイランではあるが、この町にはいわゆる「スラム」とされる場所があった。小高い丘の上や山際に、また、少し土地の低い場所にそれらがあった。足を踏み入れようとすると現地の人々が首を掻き切るまねをして、必死に止めようとしてきた。どういふカラクリだろう。それほどに危険な場所なのか。釈然としない思いだけが残った。

どの道から入ろうとしても行き交う人自身を避けて止めようとするので、引き返そうとすると、また別の人が今度は「昼ご飯をご馳走するよ」と声をかけてきた。時間を決めて約束した場所に戻ると、その人の家はスラムのなかにあった。出てきた食事はパンと紅茶とツナ缶。彼らが全力でもてなしてくれようとしていることが、じわじわと身に染みてくる。満面の笑みで砂糖を紅茶に投入する彼らの横顔を見て、私は再訪を誓ったのだ。

川崎芳勲(かきまよしひる) 1990年神奈川県横浜市生まれ。世界40か国以上で、各国の人々の日常生活を撮影してまわる。学生時代より6年間、イスラム世界の人々の奥ゆかしさに魅せられ、特にイランでの撮影を精力的に行う。青年海外協力隊としてウガンダに派遣され、農業を通じた収入向上活動に尽力した。独学してきた写真の世界にどっぷり浸かるため、2018年1月からイランと活動のスタート。国境を越えて心の壁に触れるアートの可能性を信じ、若者の才能が世界に解放されるカタチを模索している。



左: スラム区域付近で出会った兄弟。ポロボロのサッカーボールを必死に追っていた / 中: ロル族はトルコ系やアラブ系の文化に近いが、クルド語に似たロル語を話す / 右: 人懐っこい子どもたち。外国人にも恥ずかしそうに声をかけてくれた